



冬から春への境目と言われている涅槃会の高札が立てられ急に春めいた天候がめぐってきたかに見えたが、如意山 照明寺。



檀家の人、近所の人がお手伝い集っておしゃかさまの舎利(お骨)であるダンゴ作り。話のはずむ中も手は休むことがない。



本堂には大きな涅槃図が架けられている。中央には頭北面西右脇の姿、そのまわりに弟子達や動物達が集り悲しんでいるなつかしい絵図である。

待ちわびて、春。



月刊 第 595 号

まさかの雪がそのまま根雪となつてしまった今年の冬でした。特に近年はむしろ少雪でスキー場が泣かされる方が余計だった冬がつづいていたのに。それに新潟県中越地方は災害の

メッカみたいな印象を与える程に水害震災雪害とつづいたものですから報道もついついエキサイティングになってしまつて新潟がすっぱり雪に埋れてしまつたようなことで、でも豪雪地帯

の雪は想像を超えるもので唯々黙々と降りつづき雪の恐ろしさ、連日続く雪崩り作業の空しくなる程の疲れ、「雪は降っている中に除けなければ間に合わない」は雪を知っている人でなければの言葉です。ようやくその雪も終りかなあと思えるような春のあたたかさ

が涅槃会を境に訪れるとの昔からの言い伝え通りにめぐつて参りました。この日になると地べたからあたたかくなると言うのです。勿論寒の戻りと言うことであつて一進一退の春への歩みでありますが昨日(二十日)あたりから急に春が近づいた感じ

でその陽気に誘われてまず聚感園へ。勿論まだ冬囲はそのままで、正面の池はもう春のぬくもりの感じられる水の色です。ここは圧倒的に椿が多いのですがほとんどの樹が花の盛りを迎えようとしています。もう少しすれば落椿の紅が敷きつめた程に地を覆います。四番公園からは近くの寺泊保育園の園児達の明るく元気な声が聞こえてきます。自然岩で積まれた石段を少し息を切らせ乍ら昇りつめると樹間を通して海からの風が

「良寛さまの妹のむら女のお墓はここの辺りでしょか」と。つい法福寺さんの墓地までご案内。久々に山の町を抜けて聖徳寺さんの境内へ入り弥彦山からぐるりと出雲崎方面まで海を眺めて坂を下り今は広く改修された昔の金内小路から海岸への散策。

『北越雪譜』のふりかへ

キョウのふびと

「春めく」という言葉がやっと使える時節になりました。寺泊に住んでいると、今年の雪もまた平年並み、ぐらゐの感覚でしたが、新潟県の山間部は一時深刻な事態に襲われました。そこに住む友人や親戚の悲鳴が電話を通して聞こえてきました。

こんなに春の待ち遠しい年もありません。寄る年波のせいかと、会う人誰かまわす「今年の冬は寒く感じませんか？」と。十人中九人が「寒い」と応えてきました。まんざら歳のせいばかりでないのだな、とほっとしてきますが、暖房費がうなぎ登り、灯油代金に電気料が家計を

締め付けます。

冬が長く感じられます。一月はとくに長く感じられ、積雪と雪崩のため県内各地に多くの被害が出ました。津南町やおとなり長野県境の栄村では、孤立した集落がありました。鈴木牧之の『秋山記行』で知られた秋山郷と呼ばれる地域です。このニューズが流れた時、十数年前、秋山郷を訪れたことを思い出しました。寺泊から二時間半ほどで行き、決して遠いところではありません。

十日町から一一七号線で津南町に出て、中津川溪谷の九十九折を奥に登ります。思わずハンドルを切り損ねそうな、危ないカーブがいくつもありました。大赤沢までが新潟県、次の集落

小赤沢は長野県です。もうこれ以上奥に進めないどん詰まりが「切明(きりあけ)」でした。

谷あいには溪流が走り、川原からとくとくと温泉が湧き出ています。夏のことでした。水着姿の男女や子供たちが川原に穴を掘り、自前の露天風呂を楽しんでいます。友人からスコップを持っていくといいわれられていたので、海パンをはいてスコップを肩に掛け、川原に出ました。

動きそうもない巨岩がごろごろ。しかしおおむね人力で何とかできる碎石と玉石で、三十分ほどで人ひとりゆつたり入れる湯船が出来上がりました。ほこほこ湧き出すお湯は熱くて、手を入れていられないほど。溪流から冷水を引いて適温にします。

その夜はキャンピング。誰もいない朝早くに起きて谷を下り、きのう作った自前の湯船に浸かっていたら、馬のように大きな動物がこちらに近付いてきました。一瞬恐怖感に襲われ、置きっぱなしにしておいたスコップの柄をしっかりと握り締めました。動物がこちらに気付いて引き返すまで、時間の長かったこと。安堵の吐息が洩れて、野生のカモシカでした。あんな大きなカモシカを、しかもあんな近くで見たのは初めてでした。

生涯、あれほど野趣あふれる温泉を楽しんだことはありません。「切明」は、どうなっているのでしょうか？ 開発が進むのは致し方ありません。しかし、自前の湯船を楽しめる数少ない

温泉です。いつまでもあの状態をとどめていてくれれば、と願っています。いずれにせよ秋山郷は今、深い雪の下です。

南魚、塩沢の鈴木牧之が『秋山記行』を書いたのは天保二年(1831)のこと。不勉強にもわたしは、この著作をまだ読んでいません。有名な『北越雪譜』はだいたい前に読み、現在も時々取り出しては拾い読みしています。

この『北越雪譜』は、越後国内を踏査した牧之が、後半生、三十余年をかけて稿を改め書き加えた、当時としては「類例のないタイプの本」でした。『北越雪譜』の中に寺泊の記事がいくつ載っています。

まず「古歌ある旧蹟」の章。



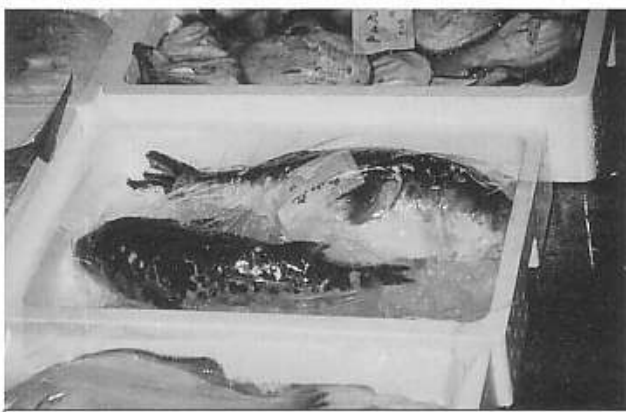
寺泊山 法福寺 副住職 海津武高師が千葉の日蓮宗大荒行堂での100日の修行を終え帰山、祖師堂から寺への行列。(2月13日)



本堂前にしつらえられた水場で水行の再現。掛声と共に二月の寒風の中で頭から浄水をかぶり、帰山報告法要開式。



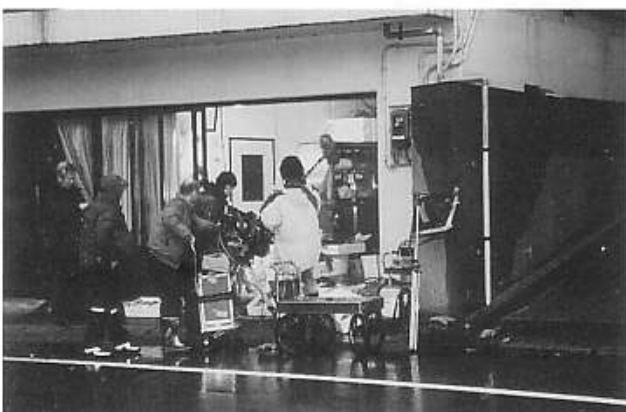
新潟全体が雪に埋れたかのような報道であるが、山間地と海岸部では大きな差がある。寺泊海岸グラウンドでは已に中学生が元気よく野球練習開始。



何しろ荒れた今冬であった。少しづつ天候が回復するにしたがって海の活動も活発になる。漁協の競場はまだ冬の魚達の世界。大きなブリが獲れていた。



この日はタラが大漁。釣りタラと網で獲った品は完全に区別されるのだが、今上がったばかりのタラである。煮付け、味噌汁、まさに冬の味覚。



荒町の魚や金十郎のばあちゃんは車付の荷台に魚のをせて町内を行商する最後の一人。近ごろマスコミの取材で人気者。今日も取材中の様子。

藤原が兼卿左遷の折り、寺泊の駅に「順風を待ち玉ひし間、初君といふ遊女をめし玉ひしに」。この時の初君の歌が「玉葉集を撰の時、初君が件の歌を入れられ玉へり」と。牧之は「是を越後第一の逸事とす」と言っています。さらに「越後の人物」の章では「寺泊にのこる順徳帝の鳳跡、義経、夢窓国師、法然上人、日蓮上人、為兼卿、遊女初君等の古跡」とあります。しかしこの部分は「百樹曰」とある通り、山東京山（京伝の弟。本名岩瀬百樹）の書き添えです。京山は江戸の著名戯作者であり、「北越雪譜」の序文を書いています。が、よく確かめませず早書きする悪い癖があったようです。夢

窓国師や法然上人が寺泊にかかわりがあったとは寡聞にして存じません。「越後の人物」として、牧之が挙げた無名人のすぐ後に、江戸の流行作家が、寺泊とかかわりがあった歴史上の有名人を書き連ねているのは、何ともちぐはぐな印象を与えます。これは「寺泊」が、越後よりも江戸で知られた地名であった証左かもしれません。さらに牧之は野積の「弘智法印」のために一章を設け、自筆の挿絵を入れていいます。五年ほど前、弘智法印の実物を拝見し、牧之の挿絵の正確さに感心しました。牧之は弘智法印を「是、他国には聞ざる越後の一奇跡なり」と言っています。

〔北越雪譜〕鈴木牧之編撰、岡田武松校訂、岩波文庫、1978）

讀 米水の里
南 登 登 看 二 百 尺
眼 下 深 布 分 水 嶺
佐 渡 燃 紅 日 没 西
北 星 仰 共 弥 彦 峰
睥 睨 東 浦 原 泰 然
朝 耀 上 天 烏 告 晚
神 靈 滿 地 妻 戸 宮
嗜 神 開 陽 米 水 里
野 積 井 木 清 作 詩

加須市	寺泊町	分水町	新潟市	江森	天野	小田野	三上	竹内	齊藤	山本	岡田	長谷川	長谷川	長谷川	平石	関本	土田	山田	小島	星野	高橋	石塚	松原	小林
新吉	清	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳	朝芳
金一	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三	金三

寺泊町	中島	和彦	金二
大塚	源治	金三	金三
川島	三重子	金三	金三
足立	一久	金三	金三
小岩	井孝三	金三	金三
高橋	医院	金五	金五
小黒	キクイ	金五	金五
古澤	みい	金三	金三
平野	茂雄	金三	金三
角原	昇	金三	金三
白川	屋	金五	金五

平成十七年度会計報告

収入合計 一、四五八、〇〇〇円
振替五九件・現金三〇二件
支出合計 一、六四六、四四〇円
編集関係 三二二、〇〇〇円
印刷関係 六一九、〇〇〇円
發送関係 四四七、四二〇円
諸経費 二六七、九四〇円

小波会二月句会詠草

兼題 虎落笛・寄鍋他当季

虎落笛

今宵ひとりのワイン注ぐ

小形 美代

虎落笛

知らぬ仏の大きいびき

小島 冬扇

天暗く

地に鳴り止まぬ虎落笛

外山 海子

日蓮の

緑の堂や虎落笛

外山 きよし

判官の

いわれの社虎落笛

大越 碧水子



北風が吹いて大荒れのと、冬の日本海の贈り物ギバサが浜に打上げられる。
煮物、サラダ、味噌漬など健康食品。



山田海岸は水がきれいで、速浅で波が立ち易いサーフィンには好条件の海岸。
岸から約300米の沖合である。



野積岬温泉日帰り浴場の工事が四月の開業を目指して急ピッチに進められている。
外観はほとんど完成。

ほろ酔いか

雅楽と惑う虎落笛

広瀬 洋子

寄せ鍋の

いつしか絶えし夕の卓

竹内 霍山

寄せ鍋を

独りで食べて二日酔

中村 流瓢

寄せ鍋や

方言訛り気にもせず

能登 頑牛

寄鍋の

湯気満ち溢る四畳半

小島 温石

鮫鎌を

捌く男の喉仏

加勢 白汀

新雪や

ころころ転び群雀

江原 汀子

鯛ちりの

ふくら白子に散蓮華

内藤 蓮子

鼻歌の

聞こえる野春隣り

水沢 蕉子

あとがき

一号出す度に終刊号へ近づく
わけて残りあと五号となりまし
た。読者の皆様にはふるさとだ
よりへの思い出などありました
ら是非寄稿して頂きたいもの
願っております。
最初の三十年分と次の十年分
計四十年分は合冊で本にまとめ

て出版してあるわけで最後の十
年分も何とかがまとめられないか
と編集部で話が出ていたのです
が三百部で出版見積りをして貰
ったのですが予想していたより
伸々準備が高くて頭をかかえて
いるところです。前の二冊を退
屈に任せてバラバラめくりなが
ら拾い読みすると、ああこんな
ことがあったんだと。その中引
き込まれて一年分位を読み込ん
だりして結構楽しいのですが、
前の物をお持ちでない方で希
望があれば残部について破格で
お別けしますのでお申付け下さ
い。今月号には野積の井木清さ
んから漢詩をご寄稿頂きました。
読み下し文も頂いたのですが編
集の体裁上今号には掲載しませ

毎月二十日発行

寺泊ふるさとだより

誌代税共(百円)

編集人 中 村 興 樹

発行人 新 潟 県 寺 泊 町

発行所 新 潟 県 寺 泊 町

郵便番号 九四〇一二五〇二

ダイヤル局番 〇二五八七五

電話 二〇二九番

振替番号 〇〇六〇一三二七四五

印刷所 吉野印刷株式会社